

[活動報告]

新型コロナウイルス感染症対策下における新たな博物館活動の事例 —ミュージアムトークならびに団体向けプログラムのオンラインによる実施を中心に—

西浦 直子（国立ハンセン病資料館）

はじめに

2020年初頭より、コロナ禍のため多くの博物館・美術館が事業計画の見直しなどの対応を迫られた⁽¹⁾。国立ハンセン病資料館でも2月末から臨時休館し、再開館後も対面によるプログラムと団体での来館利用を停止している。2020年12月現在、午前10人・午後10人、各90分の完全予約制による入館制限や、図書室での閲覧停止、徹底的な消毒・換気等を続けている。

当館では対応策としてさまざまなプランを検討・実施してきた⁽²⁾。筆者が属する事業部事業課では企画展示等のほか、オンラインによる事業にも力を入れている。本稿ではその中からミュージアムトークのウェビナーによる実施と、団体向けプログラムのオンラインツールによる実施について報告する。

1 オンライン事業の概要と取り組みの経緯

2月中旬以降、感染者数の増加を受けて当館でもイベントの延期等の検討が始まった。2月28日午後、翌日からの休館が決まり29日から開催予定だった「石井正則写真展 13～ハンセン病療養所の現在を撮る～」は延期となった（9月19日より開催）。4月からは原則在宅ワークの運用が開始された。中間期だったため執務室やロビーなどの空調はほぼ不要で、機械音もほとんどなく、薄

暗い展示室は森閑としていた。

この間に、オンラインでの発信を行う企画の用意も進められた。4月からは事業部内で執筆した資料紹介を公式Twitterアカウントで配信する「#ミニ百科」を開始した（2020年4月～12月 108回投稿）。5月以降オンライン団体対応の計画を開始し、団体プログラム向けのコンパクトな展示紹介動画の製作をスタートした。6月にようやく再開館に向けて動き出したが団体での来館利用開始のめどは立たず、利用者から「見学はいつ可能になるのか」との問い合わせが続いたため、団体もしくは多人数で利用できるプログラムの実現を急いだ。オンライン事業経験者へのヒアリングやオンラインツールを使ったイベント参加等を経て、進行の手順や使用しているアプリ、画面の作り方を学んだ。この過程で、オンライン会議用に導入していたzoomアプリのウェビナー機能を用いたトーク企画に向いたイベントとして、もともと座学形式で開催してきたミュージアムトークが該当すると気づいた。

展示解説は、動画やパワーポイントによる解説だけでなくライブ感のあるプログラムを実施したかった。例えば東京国立博物館では2020年3月から、研究員等によるギャラリートークの動画を公式YouTubeチャンネルで公開していた⁽³⁾。それも十分に魅力的ではあったが、やはり展示室からリアルタイムでの解説を行いたいと考えていた。た

(1) 例えば当館と同じく2020年2月下旬から全館臨時休館を開始した大阪市立美術館では、作品を海外各地から借用して企画していた特別展が延期となり、開館準備のための消毒薬やマスクの確保などに苦労しながら5月21日に再開館した（篠雅廣「新型コロナウイルスと美術館—大阪市立美術館の事例」『博物館研究』Vol.55No.11 (No.630)、2020年11月）。また下田海中水族館では4月11日から休館となり、展示公開している魚類や海獣の飼育と職員の勤務体制の調整などが行われた。同館の浅川弘は「今の状況のままだとすれば、お客様と動物たちとを守る為に多くの制限を付けた上で（体験型プログラムを…引用者注）実施するか、または中止せざる得ない〔ママ〕。再開出来たとしても、まだまだ出口の見えないトンネルの中に居るようで、今よりもこの先への不安は膨らんでいる。」と書いている（浅川弘「水族館職員」、左右社編集部『仕事本』左右社、2020年、引用は142頁）。

(2) オンラインによるイベントや外部講演の実施、図書室のリモート貸出の実施、さわる展示の撤収など。在宅勤務導入を機に館全体でGoogleドライブの利用も開始した。事業課では配布物として、常設展示1「歴史展示」のみに設置されていた「かんたん解説」を、常設展示室2・3含めすべてのコーナーについて設置し、「はじめてのみなさんへ」としてリニューアルし、当館公式Webサイトに掲載した。会期を移動して開催した石井正則写真展「13（サーティーン）～ハンセン病療養所の現在を撮る～」（2020年9月19日～12月6日）付帯イベントを館公式YouTubeチャンネルからライブ配信するなど、ここで詳細に取り上げられないオンライン事業も実施している。

(3) 東京国立博物館では2020年2月末、政府等による感染防止への対策が発出された後、3月3日には特集展示「おひなさまと日本の人形」を担当学芸員が解説する20分弱の動画を公開していた（【オンラインギャラリーツアー】三田研究員が語る、特集「おひなさまと日本の人形」<https://www.youtube.com/watch?v=Cz3aqOlli4M&t=340s> 最終閲覧日 2020年12月28日）。

だそのためにはWi-Fi環境整備など一定の準備が必要だった。

そこで、以下の段階をふむこととした。①もともと座学形式であるミュージアムトークをライブで実施する。情報システム部門の負担軽減のためウェビナーなど当日のアプリの操作は外部技術者に委託し、それまで館のWebサイトから行っていた申し込みやリマインド等もウェビナーアプリで一括して行う。②団体利用のニーズに答えるべくオンラインプログラムを用意する。常設展示室のWi-Fi設備が整うまでは有線LANを用いたライブによる解説や質疑を試みる。③Wi-Fi環境の整備完了次第、展示室を移動しながら解説を行う。

実際にはこれらの事業は下記のタイミングで開始された。

（6月23日 再開館）

7月末 ミュージアムトーク再開（Zoomウェビナー利用）

8月 予約キャンセルとなった団体向けにオンラインによるプログラム開始。有線による展示室からの配信。

9月 展示室のWi-Fi環境整備完了。

10月 オンラインによる団体プログラム 新規団体受付開始

2 ミュージアムトークのライブ配信

ミュージアムトークは、館内の調査研究事業の活性化と、来館者に近い距離で学芸員等の個性を生かした事業を行うことを目指して2019年に開始したイベントである。テーマの豊富化のため、課をこえて広くスピーカーを募り実施してきた。参加者からは、学芸員のさまざまな表情が見え、常設展示で取り上げていない内容にもふれられる事業として反響を呼んできた。2020年2月15日の開催後はCOVID-19対策のため休止していたが、館内で企画・広報から実施までを行えるフットワークの軽さと、座学するためにカメラ位置や通信環境を整えやすいことから早期にオンラインで再開することにした。

ただし企画の段階では、オンライン配信事業を

自ら手掛けた経験のあるスタッフはほぼ皆無だった。情報収集の過程で、通信環境さえあれば少数のスタッフで運営できることや、既に導入済の通信アプリを用いて実施できそうだという見通しをたてた。資料やストーリーは講師が作ることとし、実施にあたっての留意点や申し込みの手順などの調整を進めた。通常開館時には小さめのレクチャーや小規模の団体への対応、会議などの手ごろなスペースだった研修室が、このころから配信室に様変わりし、LANケーブルやPCがセットされている時間が増えた⁽⁴⁾。

初回の実施は7月25日（土）、講師は事業課の主任学芸員が担当した。技術支援者として、オンラインイベントを自ら手掛けてきた外部スタッフに主としてアプリの取り扱いの業務を委託した。情報のリリースは7月9日とし、1週間の広報期間を設けて7月15日（水）から申し込み受付を開始した。広報ツールは当館公式Webサイト、FacebookやTwitter等である。広報媒体としてチラシを館内でデザイン・印刷したが（2019年に製作した対面実施の際のデザインを流用）、ピックアップ形式の配布は時節柄控え、来館者のうち希望する方に受付で手渡すのみとした。驚くべきことに3日後の18日（土）にはすでに用意した100人分の席が埋まった。たとえオンラインでも、顔の見えるイベントが必要とされていることを痛感した。

初回当日は88人の参加を得た。オンラインのイベントでは「途中退室」する人もそれなりにいると想定していたが、退出者はほとんどなかった。これ以降も、申し込み人数の多寡はあっても当日の参加者はおおむね最後まで御視聴いただいている。毎回具体的なテーマ設定をするため、関心の度合いが強いのかもしれないし、トーク後にQ&A機能を用いた質疑の時間を設けているためかもしれない。短時間で予約が満席になったことから、実施後のアーカイブ配信はほとんど編集せず、10日後に館公式YouTubeチャンネルにアップした。

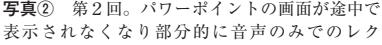
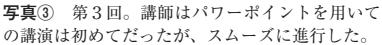
以後各月1回、原則として第3土曜日に同様の手法でトークを開催し、すべての回について館公

(4) こうした配信用の場所ができると通信環境の維持管理を行う部門の負担が増える。オンライン事業を行うにあたり十分注意しなければならない点である。

式YouTubeチャンネルからアーカイブ動画として配信している（表1）。

【表1 2020年に実施したオンラインによるミュージアムトークの概要】

写真は全て当館撮影

	受付開始	実施日	講師	タイトル	申込人数	参加人数	
	2020/7/16	2020/7/25	木村哲也	ハンセン病問題と保健婦たち	100	86	
保健婦経験者の証言を通して、ハンセン病隔離政策の地方自治体における活動の一端を紹介。入所の説得、社会復帰の支援、地域住民の差別・偏見の是正など、これまで十分に明らかにされてこなかった側面に光を当てた。参加者からは戦後ハンセン病対策の形成、地域で対応を担った保健婦の姿について積極的な質問が寄せられた。							
第1回	アンケートより						
	遠方なので、できれば今後もオンラインでの講演会も続けてくださると助かります。とても勉強になりました。						
とてもわかりやすく、進行もスムーズでよかったです。							
初めてのオンライン講座でしたが、特に大きな問題もなく聴講することができました。地域から問題に迫り、社会全体が経験したこととして考えていくきっかけになるいい講演でした。次回も期待しています。							
貴重なお話をありがとうございました。新型コロナウイルスの問題で感染症に対する差別に興味を持ったのがきっかけで参加しました。本講演で、ハンセン病においては国民の無関心により行政の暴走を止められなかったこと、誤った知識による偏見や差別で多くの人が苦しんだことを知りました。そこからコロナ禍で私たちがとるべき行動というのも見えてきた気がします。苦しい立場にある人に関心を持つこと、正しい知識を身につけること。歴史に学び、今後病に苦しむ人が社会的にも苦しみを抱えることがないような社会を実現していきたいです。							
第2回	受付開始	実施日	講師	タイトル	申込人数	参加人数	
	2020/8/1	2020/8/29	西浦直子	『青い芽』の中学生たち	100	77	
多磨全生園にあった東村山中学校（1960年4月より東村山市立第二中学校）全生分教室の卒業文集『青い芽』に掲載された作文や詩を紹介。当日は副題を一「転換期」の多磨全生園で綴られた思い一とし、昭和30年代の号を中心に児童の詩や作文16点、ほか版画などを通して、療養所での生活と将来の社会復帰との間で児童たちが何を問題としたのかを検討した。							
第3回	アンケートより						
	今まで聞いたことのある、ハンセン病に関する多くのは、大人達の世界でした。子供、それも中学生の話を聞けて新たな発見がありました。差別や偏見が横行する中での葛藤、夢、それぞれが生々しく伝わってきました。また、現在のコロナ禍の状況と同じような部分があると感じました。						
オンラインとは言え、間近に入所者の生活や言葉に触れてこられた職員の方からの語りには、胸に迫るものがありました。まだ資料館を訪ねたことがありませんでしたが、ぜひ実際に現地でさまざまな語りに耳を傾けてみたいと思いました。							
最後の考察部分で、年代による変化や表現の背景について述べられていたのを聞き納得し、ただ作品を受け取るだけでなくそれらを問題意識をもって研究することの意義やおもしろさを感じました。以前より長島愛生園については出身地に近いこともありその存在は知っていましたが、今回の2回目のミュージアムトーク企画で初めて国立ハンセン病資料館のことを知りました。ぜひ機会を見つけて訪れたいです。木版画の展示や朗説会も参加してみたいです。次回のミュージアムトークも申し込もうと思います。							
第3回	受付開始	実施日	講師	タイトル	申込人数	参加人数	
	2020/8/29	2020/9/19	清原工	北條民雄を読み直す	100	68	
全生病院（現・多磨全生園）の入所者で、『いのちの初夜』などの作品で知られる北條民雄（本名・七條晃二）が残した文学作品や、そのふるさと徳島県阿南市の写真などを紹介。1914（大正3）年の誕生から療養所への入所、1937（昭和12）年に23歳で夭折するまでの間の出来事などについてお話をした。							
第3回	アンケートより						
	人と人との縁の不思議を感じたお話をした。そして北條さんの「生」というものをふまえて改めて作品を読み深めてみたいといいます。ありがとうございました。						
北條民雄について様々な観点からのお話を聞き、今後もさらに深く作品を読んでいきたいと感じました。特に故郷の徳島の様子はほとんど知らなかつたので写真もあわせて大変興味深かったです。作家についてさらに掘りさげるお話やハンセン病の文学作品の系譜についてのお話を聞いてみたいですね。							
資料館に展示している北條民雄の写真を初めて見たとき、この人と何かつながっているような不思議な感覚に包まれたことを思い出します。講師の清原さんご自身との関係を交えながら「生きていた北條が見た（だろう）景色（写真）」をご紹介いただき、とても身近に感じることができました。徳島阿南も一度訪れてみたいと思っています。オンラインの講演は予想以上に心労があったと思います。が、これも新たな日常ですので今後も様々な方法で発信してください。							

第4回	受付開始	実施日	講師	タイトル	申込人数	参加人数	
	2020/9/19	2020/10/24	金貴粉	山本暁雨の人と書	75	53	
16才で全生病院（現 多磨全生園）に入所し、歌舞伎、俳句、書と様々な文化活動に取り組んだ山本暁雨（本名・熊一 1899-1973）の人と表現について考察。隔絶された療養所のなかで生き抜く意味を見出すように、歌舞伎公演に打ち込み真の芸術を目指す姿、手指と視覚の障害を乗り越え揮毫する姿から、強靭な意思と表現への一途な生き方を示した。							
アンケートより							
書の解説はさすがでした。また歌舞伎や野菜の品評会の話は初めて聞きました。療養所の中で工夫をいろいろなことがなされていましたが、歌舞伎は驚きでしたし、感動しました。遠方の方でも参加できるウェビナーは有効ですね。また参加したいです。							
今まで知らなかった療養所での一人一人の生きかたを、今回も教えていただきました。閉じ込められた空間を作った社会のあり方については、いつまでも問うていかなければなりませんが、その中で気高い人生を送られた方たちに、人間とは何かということを学ばせてもらっています。講師の丁寧なご説明に、書の見方も教わりました。これからは療養所で作られた作品だけでなく、他の作品についても見方が変わりそうです。							
山本暁雨についてほとんど知らなかったので今回のお話はとても興味深かったです。療養所内において社会と隔離された中でも自己研鑽への強い欲求があったというお話が印象的でした。改めて暁雨の書を資料館を訪れた際にじっくりと鑑賞したいなと思います。							
第5回	受付開始	実施日	講師	タイトル	申込人数	参加人数	
	2020/10/24	2020/11/21	大高俊一郎	ゲートボール熱中時代	41	31	
1980年代から療養所で盛んになったゲートボールの活動について、歴史と意義を考察した。差別と向き合いながら、ゲートボールを楽しみ練習に打ち込む様子や、作戦を武器に全国大会優勝をとげたプレーヤーたち、療養所と地域との懸け橋となった人物も紹介。野球のような療養所内での交流試合だけでなく、地域で一般的の試合に参加した事例から、地域との交流のあり方にも言及した。							
アンケートより							
ハンセン病について全く知らなかったが、身近であるゲートボールと交えて説明を聞いたことで差別やそこからの周りとの打ち解けなどを理解しやすかった。							
以前、入所者の方々がゲートボールをするのを見たことがあります。あのゲートボールの姿に様々な想いがあったのかもしれないと思うと、もう少しお話を聞いておきたかったと思っています。スポーツを通してハンセン病を見るという視点はとても新鮮ですね。							
療養所でゲートボールが盛んに行われていたこと、さらに全国大会を制すほどの強豪チームがあったことなど、初めて知ることがたくさんあり、とても興味深いお話でした。どんな人でも普遍的に心が動かされるスポーツだからこそ、療養所外の社会とつなぐ役割や、ハンセン病問題の啓発の役割を担えたのかなと感じました。							
第6回	受付開始	実施日	講師	タイトル	申込人数	参加人数	
	2020/11/21	2020/12/19	橋本彩香	多磨全生園の隠された史跡をたどる	88	67	
多磨全生園の史跡や建物について、館内と園内との二元中継を交えて解説。ハンセン病の患者・回復者の生活などを物語る史跡について、往時の姿を伝える写真や、ライブカメラによる現場の様子をふんだんに盛り込んで紹介した。							
アンケートより							
説明や資料と合わせて中継を見ることで、史跡の状況がとても分かりやすくて良かった。講師の個人的な感想も、内容に生き生きとした印象を加えていたと思います。							
近くにうかがうことがよくあるのですが、全生園について詳しい人が周りにはいなくて、こういった話を聞く機会が今までなかったので、とても興味深く拝聴しました。今度、自分の目でも実際に見てみたいなと思いました。							
園内を生中継するという企画が大変素晴らしく、全生園で同じ時を過ごしているという感覚を得ることができました。ハンセン病についての知識は書籍からも得られますが、同じ場・時間・体験を共有するという意味において、こういった企画は大変貴重で先駆的なものではないかと思えます。是非またやって頂きたいと思います。							
初めて参加しました。同じ内容を現地での見学に取り入れたら、倍以上の時間がかかり、オンラインの利点を生かした非常に効果的なイベントだったと感心しました。お話しの内容も、学芸員さんが過去に見た史跡の様子も加えられ、大変興味深く、面白く、時間が短く感じました。ありがとうございました。							
第6回	アンケートより						
	ひ訪れたいとの声も多く、オンライン事業が来館の契機になっていることがわかる。アプリの契約上人数に上限があるが（2020年12月現在100人）、各回の人数を見るとこの規模での開催は適当といえるかもしれない。						
ほかにも実施して初めて理解できた点がいくつもある。技術支援者からはトーク中の注意事項から画面切り替えなどの基礎的な操作をはじめ多くの教示を受けたが、いずれも動画を視聴する側の視点に立った工夫であり、対面でないだけに、こ							
写真④ 第4回。山本暁雨の障害のあり方と筆の持ち方について説明する講師。わかりやすかったとの評価をいただいた。							
写真⑤ 第5回。この頃から館のスタッフも徐々にセッティング等に慣れてきた。							
写真⑥ 第6回。館内のスタジオ。開放感のある場所から送信するためロビーにスタジオを作った。							
写真⑦ 第6回の園内カメラ。通信確保と画質のバランスを考えスマートフォンで撮影した。							

各回のテーマ設定が具体的であること、加えておそらくオンラインでの実施が移動のための負担を減らしたことによって、アンケートによると、各回とも半数から三分の二程度は本イベント初参加の方である。またアンケートの自由記入欄では、COVID-19対策のため外出を控えている人からはもちろん、遠方のためにこれまでイベントに参加できなかった人からも好意的な評価をいただいている。さらに近隣在住だが当館の存在やハンセン病問題に初めて接したという方も少なくない。ぜ

ひ訪れたいとの声も多く、オンライン事業が来館の契機になっていることがわかる。アプリの契約上人数に上限があるが（2020年12月現在100人）、各回の人数を見るとこの規模での開催は適当といえるかもしれない。

ほかにも実施して初めて理解できた点がいくつもある。技術支援者からはトーク中の注意事項から画面切り替えなどの基礎的な操作をはじめ多くの教示を受けたが、いずれも動画を視聴する側の視点に立った工夫であり、対面でないだけに、こ

ちらには見えていない参加者の利便を考える必要があることを痛感した。またアーカイブ動画限定のアフタートークなど当日のライブ配信にはないオプションを作ることも学んだ。アプリの設定ミスでリマインドメールが英語で配信されてしまったり、アンケートフォームがチャット画面の質問に埋もれてしまって再度URLを配信したりすることもあった。こうした点は回を重ねるごとに修正を行っている。

スタッフの在宅勤務が長引き、配信現場に立ち会うことができるのは各人とも数か月に1度のためなかなか身につかないけれども、年末には館内スタッフの手で相当の部分を行えるようになってきた。12月に実施した「多磨全生園の隠された歴史をたどる」では、国立療養所多磨全生園の許可を得て現地にサブカメラを携行し、資料館内と現場からの二元中継を行なうまでになった。試行錯誤しながら進めて結果的に実現できたことは若いスタッフの自信につながったと思う。アンケート結果は極めて好評であった。また当館としても、隣接する多磨全生園の史跡について発信する方法を新たに得たのは大きな成果であった。

2021年2月には沖縄愛楽園交流会館の学芸員にトークを依頼した。今後、全国各地のハンセン病療養所社会交流会館等の学芸員にも広く参加を呼びかけたい。話者も参加者も地理的な距離を気にせずに参加できるメリットを生かし、さまざまなテーマでのトークと共に、実際に訪れる困難な現場へと参加者をいざなう機会にしたいと考えている。

3 団体向けプログラムのオンライン・ライブ提供

時間を2020年6月に戻そう。再開館が見えていたとはいっても、即従前と同様に大人数を受け入れられないことは明白であり、引き続きオンラインによる展示解説について模索していた。しかし当時原則として在宅勤務だったスタッフにとって、未経験のオンラインによる解説の計画は難しかった。休館中のオンライン会議では、プランを説明する筆者の声は上滑りして聞こえ、スタッフの「不安しかない」という発言が耳に刺さった。館内の

他のセクションでも、この時点ではオンラインでのライブプログラムは実施したことがなかった。

しかしパワーポイントや録画だけで説明することはなんとしても回避したかった。スクリーンに映る展示室は別の場所に現存し、見ることができるので、という感覚が拭えないからである。それまでの展示解説を思い浮かべても、ライブの方が生きると思われるシーンばかりが思い浮かんだ。できるだけ展示をライブで活用していただきたい、この点がオンラインでの展示解説を行う際の出発点であった。

ただその際、申し込みをはじめとするプログラム利用者との調整をどのように行なうかを解決しなければならなかった。まずオンラインプログラムに参加するための通信環境は施設や組織によって相当ばらつきがあり、さらに当館スタッフの経験も浅く、実施時はもとより申し込み受付の時点で対応に苦慮することが想定された。加えてこれまで当館で実施してきた団体来館者の受付は、参加者との事前調整や当日のアクシデントへの対応などの業務を団体予約担当者や受付スタッフが整理することで成り立っていた。ほとんどの職員が在宅勤務になるなか、セクションの異なるスタッフと申し込み受付からの課題をひとつひとつ想定し解決方法を共有するための折衝を重ねて、まず従来から来館団体の窓口を担当してきたスタッフが来館予定だった団体にオンラインプログラムへの参加を呼び掛けることになった。在宅勤務の長期化等を念頭においたWeb上での申し込みの一元化も秋以降の実施を目指して動き始めた。

内容についてはポイントを絞ったコンパクトな展示解説や、資料を用いた質疑が可能かどうかを検討した。まず団体利用者は小中学生が多く、利用者が扱いやすいサイズのプログラムにする必要があった。またモニター越しの解説を対面時と同様90分間行なうのは現実的ではないとの声もあり、それらの解決のため学芸員による短く平易な解説動画作成に取り掛かった。小学生の時間割はおよそ1枠45分であるので、挨拶とガイダンス、動画視聴と簡単な確認の後に休憩をはさめる程度の長さを想定した。プログラムのメインメニューはライブでの解説もしくは質疑とし、基本となる展



写真⑧ 展示紹介動画の撮影。録画はスマートフォンで行った。

示構成を動画で紹介するコンテンツを製作したのである⁽⁵⁾ (写真⑧)。

なお常設展示室ではグラフィックパネルの張り替えなどのメンテナンスが進行していたため、当面常設展示2-3のみの20分弱の動画を作成した。この動画を用い、さらに事前学習用に語り部の講演の録画やガイダンス動画をYouTubeの限定公開URLから視聴していただく手はずを整えた。

ちょうど夏休み明けに当館に来館予定だった小学校から、来館以外の形での利用方法についての問い合わせもあり、同校の教諭と、別に近隣の公立中学校の教諭の協力も得て、9月にプログラムを開始した。以降、12月までに少しづつ対応を重ねている【表2】。

【表2】2020年中のオンライン団体プログラム利用状況（2020年9月～12月）

9/1 東久留米市立久留米中学校2年生	160人	11/6 東村山市立南台小学校6年生	52人
9/4 小平市立小平第五小学校6年生	110人	11/6 東村山市立南台小学校6年生	52人
9/17 立川市立新生小学校6年生	70人	11/11 立川市立第七小学校6年生	34人
9/18 朝日生命保険相互会社人権研修	65人	11/17 土浦市医師会付属准看護学院1年生	70人
9/25 横浜市港北区役所人権研修	20人	12/8 板橋区医師会看護高等専修学校2年生	35人
10/1 府中市立矢崎小学校6年生	59人	12/17 東京地方裁判所新任判事補研修	40人
10/14 多磨全生園附属看護学校1年生	20人	12/23 埼玉県立松山高等学校2年生	43人

多くの団体は、資料館およびハンセン病問題に関するガイダンス（15分程度）とライブでの展示解説を組み合わせて利用する。事前学習のため、ガイダンス動画（歴史編40分、医療編15分）や回復者の半生をアニメーションで伝える動画、もしくは当館で無料配布しているパンフレット等を利用する団体も多い。

当初の展示解説は館内のWi-Fi環境が整っておらず有線でライブ中継していたため、学芸員の動きも少なかった（写真⑨）。9月15日にWi-Fiが開通し自在に動きながらの解説が可能になったので、以後の利用団体には解説者とカメラ担当スタッフのコンビネーションを基本形として実施している（写真⑩・⑪）。

利用者にとっても新鮮な場面が多かったよう

だ。例えば白手袋を着けて資料にさわりながら、その意味やエピソードを紹介する（写真⑫）。実際に見学する際はそうした場面にはなかなか出会えない。またカメラスタッフは学芸員とは限らな



写真⑨ 展示室2の山吹舎一室原寸ジオラマの前から配信。有線LANを使用している。この段階ではPC内臓カメラを用いていた。

(5) この段階で、前年度からの企画が生きてきた。2020年の東京五輪開催に伴うインバウンドを想定し、長らく課題だった展示の多言語化を行う予定で解説シートの原稿を整理していたので、動画製作のナレーション原稿にこれを用いたのである。以前より、歴史的・文化的背景の異なる海外からの来館者には、まず小学生向け解説シート程度の理解を促すのがよいとのアドバイスを受けており、このシートの日本語版の見直し・追加作成を2019年から開始していたことが結果的にオンラインによる団体対応へのステップになった。



写真⑩ 展示室内を移動しながら配信。的確なカメラワークに支えられスムーズに移動している。



写真⑪ 園内通用券の解説。ケース内をズームアップ中。解説者はモニターの参加者の様子を見ながら説明を進める。



写真⑫ プロミンのアンプルの実物を小学生に見せている。(小平市立小平第五小学校提供)



写真⑬ 解説者の呼びかけに手を挙げて答える児童たち。(小平市立小平第五小学校提供)

いが、業務を共に支えているスタッフならではの理解と動きの的確さがある。

質疑応答の時間も人気が高い。対面での対応時には、場所や時間的な制約から質疑応答の時間は学校団体での利用に限定していたが、オンライン導入時、利用者にもスタッフにも必要と判断してライブでの対応を決めた。事前学習で発生した質問への回答を行う場合は準備が必要で、現在も在宅勤務が続くスタッフには負担になる面もあるが、資料や展示から生じた疑問について利用者とスタッフが共に考える場面、利用者がハンセン病問題について具体的に捉える行為の援助のひとつであり、展示を用いた啓発にとって不可欠な手法である。

ミュージアムトークと同様、これらのプログラムも実施して初めてその意義と課題が見えてきた。たとえば対面の解説で生じてしまう、動線が狭いために解説の対象となっているモノを見ることができない参加者をなくすために、オンラインを用いた手法は効果的である。多数の来館者にひとつの資料や特定の場面を示しながら説明をする際、カメラが対象をズームアップすればよい。また従来の展示解説ではできなかった、人数の多い団体への展示解説も可能になった。

加えてオンラインプログラムの場合、解説者およびカメラスタッフと利用者とがお互いにモニター越しの相手に近づこうとする意志が働いているように思う。オンラインで一律に解説する場合、利用者の意志と身体の能動性は制約される。しかし来館者とモニター越しであっても共時性のもとにコミュニケーションすることは、解説者自らが利用者（たち）と通信しようとする積極性がより引き出される（写真⑬）。対面であれば利用者の能動性にある程度依存して進行することも可能だが、オンラインの場合には話者の目の前にあるのはモニターやスクリーンなので、意思疎通がとれているかを解説者自身が能動的に確かめ、利用者に近づいていかねばならない。メリットと呼ぶのがふさわしいかはともかく、オンラインならではのコミュニケーションの特徴が発揮されるのである。

こうした点はすべて、実際にライブでの団体対応を行ったことによって体得したものだ。展示は

展示室で（もしくは資料がある場所で）見るもの、自分で動いて見るもの、といった視点だけで考えていては気づけない。展示室で、生で資料を見ることがの重要性を補完するだけでなく⁽⁶⁾、モニターを通したときに実現できる見学のかたちや、資料を前にしたコミュニケーションがありうることの発見は、今後の事業の展望を作るための重要な成果であった。

なお付け加えれば、オンライン対応であってもライブにこだわったのは、昨年度以来各療養所の社会交流会館等の学芸員とともに検討してきた「語りの継承」に関する身体性を手放さないためでもあった。来館者との対話のさなかに、資料の意味やエピソードがあふれ出していくと感じることがある。そして伝えるべき意味は、解説者が回復者との接触を通して、沈黙や身振りなどを含めたひとつの時間と場所とともに記憶されている。資料と、利用者との間での緊張がその記憶をバネのようにはじいて呼び起こす。来館者と資料とをつなぐ立ち位置を手放さない、ひいては利用者にハンセン病問題についての正しく豊かな理解を提供するために、まずスタッフが伝え手としての身体性を取り戻す必要を痛感したのがコロナ禍であったともいえる。

ある団体の実施後アンケートでは以下のような回答をいただいた。

「・全員が同じ距離で参加できるため、声の聞こえやすさや見本等の見やすさが全員共通なのでよかったです。
・生で見るのと比較して距離感が少々掴みにくかったように感じました。
・距離が離れている人にとっては移動がネックになるので、どこでも見学できるようになるZoomはよかったです。Zoomを使うことで関東圏以外にも日本全国でハンセン病への理解を広めることができると感じます。」

「はじめはオンライン形式による研修で少し不安があったのですが、大変丁寧にご説明してくださったため、ハンセン病の歴史や生活の状況等深く理解することができました。一方で、自分の目で見て感じることも多くあると思ったため、直接資料館に足を運んで「人権の森と史跡めぐり」をしたいと思いました。」

これらはオンラインによる展示解説を含むプログラムの特徴を明瞭に示している。可能性と課題とを、発信者と利用者が共に自覚していることは、今後よりよいプログラムの創造に積極的に取り組めることを示唆している。

4 オンラインによる事業の課題

最後にオンラインによる事業の課題を整理する。

1) 意思と偶然の喪失

まず利用者が、設定された動線の中とはいえない自分の意志で見る対象をえらび、その意味をくみ取る、つまり展示の利用に強力に介入していることはどれだけ意識してもしそぎることはない。

東京都葛西臨海水族園長の錦織一臣はコロナ禍に博物館が失ったものとして、「偶然」の発見、博物館の場の活動があったはずの2020年という「時間」、博物館の場の「賑わい」の3つを挙げているが⁽⁷⁾、なかでも偶然性の喪失は、ハンセン病問題には関心が薄いが別の視点から興味を持って訪れた来館者に、ハンセン病問題にふれる糸口を用意する方法を模索してきた当館にとって事業の肝を失いかねない点である。

COVID-19対策中に実施された石井正則写真展「13（サーティーン）～ハンセン病療養所の現在を撮る」で行ったアンケートや、同展観覧者によるTwitterへの投稿には、写真展とともに常設展示にも圧倒されたとの声を多数いただいた。また語り部の話を対面で直接聞くことが困難ななかで、展示公開している証言映像コーナーへの反響

(6) 「おうちミュージアム」の企画者である渋谷美月はオンライン事業について、病気や居住地域など病気や居住地域などさまざまな事情で来館できない人にも利用してもらうこと、来館利用の代替手段ではなくインターネット発信ならではの工夫や場所に縛られないからこそその学びの設計が重要であることを指摘している。渋谷美月「コロナ禍をきっかけとした「おうちミュージアム」の試み」（『歴史学研究』No.1004、2021年1月）。「おうちミュージアム」は2020年3月4日、北海道博物館Webサイト内に開設。「自宅で過ごす子どもたちとその家族のために、おうちで楽しく学べるアイデアを提供する」（上記52頁）ことを目的とし、参加館の所蔵資料を用いたコンテンツを配信している。2020年8月20日現在、国内215館が参加。

(7) 「なにかを見るついでにのぞいてみたところで発見があったり、目的なく立ち寄った一角でそれまで興味のなかったものの良さにはじめて気づいたりといったことは、その場に身を置いてこそ体験できたことであったろう。」錦織一臣「新型コロナウイルス感染症パンデミック下の博物館」特集にあたって（『博物館研究』Vol.55No.11（No.630）2020年11月）7-8頁。

もあり、時間の制約（午前・午後各90分）への苦言も多く聞かれた。これらは来館者が能動的に資料館の展示を利用していることを示しており、現場に立って任意の展示や資料とかかわることによってもたらされる認識、理解の豊かさを示している。

なお「13」の際には石井氏のYouTube配信をきっかけに来館した人も少なくなかった。よく言われることではあるが、オンライン事業は確かに現地に足を運ぶ契機になっていることも実感している。今後も積極的な発信に努めなければならぬことはいうまでもない。

近年、企画展やイベント等を通してさまざまな世代の多様な関心を持つ方々の来館が増加していくだけに、オンラインでも今後バリエーション豊かな配信を行えるよう検討しなければならない。

2) 利用者とスタッフの負担

移動などの物理的な消耗がないとはいえ、利用者の負担は少なくない。通信が途切れてしまうのではないか、あるいは授業時間内に終了するかどうか、個別のアカウントから（例えば自宅の通信環境で利用している場合など）の場合は全員参加できているか、などの不安は尽きない。ある団体へのプログラムの実施後、団体の担当者から「このプログラムを準備するためにどれだけの積み重ねがあったかと思う」との声をいただいたことがあったが、この言葉は利用者側の負担が大きいことも示しているだろう。そして言わずもがなのことながら、パソコンやインターネット環境が整わない場合には利用が難しい。

また視覚障害や聴覚障害をもつ人びとにとってオンラインのプログラムはまだまだ利用しにくい部分がある。たとえばミュージアムトークについて、ライブでの字幕があるか問い合わせをいただいたことがある。残念ながら現在、アーカイブであっても字幕を付けられていない。ぜひ対応していきたい。

スタッフの負担感も解消されにくい部分がある。開館する以上、展示の点検整備や資料の保管

に関する業務も、それを前提として行わねばならない。また資料整理や現場のメンテナンス、レンズ対応や資料の利用への対応など、わずかな出勤日を使って対応しなければならない業務は他にも数多くある。館蔵資料を用いた調査研究や展示計画などは確実に滞っていく。こうした状況でオンライン事業を行うことは業務量の増加につながり、このタイミングで行なうことが果たしてよいのか、また相応の技術をもつ職員がほぼ皆無である環境で実現可能なのか、といった疑問が寄せられたこともある。多くの博物館・美術館施設が、こうした館内での意見調整に時間をかけていることが予想される。まずはできるだけ多くのスタッフが技術的な不安感を解消し、対面で行なっていた事業のなかからオンラインで広がりをもてる可能性があるものを見つけ、実現していく工夫が必要だろうし、その際には他館などとの連携が大きな力になると思われる。そしてポストコロナの時代において、来館者とオンラインによる利用者との双方に対応しようとする場合は相応の検討が必要だろう。

おわりに

当館は国立療養所多磨全生園に隣接して設置されており、ハンセン病患者・回復者の歴史が刻まれている現場にふれることができる。各地のハンセン病療養所の社会交流会館等も同様の意味を持っている。

またCOVID-19対策のために移動の自粛が呼びかけられるなか、私たちは情報源をますますインターネットに依拠するようになり、その結果検索エンジンによる解析によって個々の利用者がSNSやネットニュースで見たいものしか目にしなくなる動きが加速しているだろう。こうしたなかで、差別や人権について考えざるを得ない場所を持っていることは非常に重要である。選ぼうが選ぶまいがそこには問題があり、そこに行けば自分で考えざるを得なくなる空間の確保につながるからだ⁽⁸⁾。差別や人権をめぐる展示の場に限らず、博

(8) 2020年4月9日、Webニュース『withnews』の連載「withコロナの時代」#3に日本新聞博物館館長の尾高泉氏のインタビュー記事（3月30日聞き取り）が掲載された。<https://withnews.jp/article/f0200409001qq0000000000000000W00810101qq000020857A>
最終閲覧日 2020年12月29日。タイトルは「「不要不急」と言われた博物館長の胸の内 「社会のおまけじゃない」問い合わせる「ものを考える場所」の必要性」。聞き手・執筆は奥山晶二郎。尾高氏はここで、職員の生活保障など休館にかかる調整とともに、「毎日、一番に考えていることは、足を運んでもらうことで成立する施設としての役割です」という。尾高泉の次の稿も参照のこと。「『新しい日常』に博物館が問うもの、問われるもの」（『博物館研究』Vol.55No.10 (No.629)、2020年10月)。

物館がもつ社会的包摂性をCOVID-19対策が侵食しつつあるとの指摘もある⁽⁹⁾。私たちは今、現場で何が失われる可能性があるのかを見過してはならないだろう。

一方、オンラインによる事業を経験して、当館では新たなプログラムのヒントを見つけつつある。対面には対面でしかできないコミュニケーションがあり、オンラインの手法でこそ促進される情報発信と意思疎通もある、その気づきの局面に私たちは立っている⁽¹⁰⁾。そしてこのポイントから、もしかしたら会えない人の語りや経験を継承し、それらに耳を傾けていく自然な構えもできてくるかもしれない。

館蔵資料の活用、資料と人とをつなぐという方法での社会啓発のあり方として、資料そのものを鑑賞し意味を探すこと、展示室に立つこと、あるいは資料にふれることを通して患者・回復者とその家族への理解を深める手法をさぐってこそ、モニター越しに見、聞き、話すオンラインツールで伝えられる効果的な内容を作ることができる。逆も可なりなのかもしれない。オンラインによる対応や配信のためのコンテンツ製作を通して、これまでの見せ方、展示手法では不十分であった点を抽出することも可能ではないかと、そろそろ考え始めている。

(9) 橋本佳延「コロナ禍で博物館から失いたくないもの」(『Musée [ミュゼ]』第126号、2020年12月、特集「コロナ禍とミュージアム」)。

(10) なお感染拡大防止対策として手でふれる展示を撤収する経験は、さまざまな障害をもつ人びとにとって開かれた展示や事業を行うためにどうしたらよいかを考える契機となった。こうした工夫はコロナ禍における工夫だけでなく展示手法について新たなアプローチを創造する切り口にもなるだろう。広瀬浩二郎「『ユニバーサルミュージアム』の考え方」(『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける!』小さ子社、2020年)136頁。